

2018年度最高学部4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強について

副学部長 遠藤 敏喜

概要 2018年度最高学部4年課程卒業研究は29人が22のテーマに取り組んだ（個人研究19・共同研究3）。2年課程卒業勉強は5人が1つのテーマに取り組んだ。成果はそれぞれ論文にまとめられ、2019年3月2日（土）開催の報告会で発表された。学生は“皆で創り上げた”達成感と“大きく成長できた”実感を得ていた。

I. 最高学部の卒業研究と卒業勉強とは

自由学園最高学部は4年課程・2年課程とも、自由学園での学びの集大成として、最終学年の1年間を通して研究活動を行い、成果を論文にまとめ、卒業前に開催する報告会で発表する。2018年度は表1に示す23本の論文が提出された。

4年課程の卒業研究は、3年次から2年間所属するゼミナール「テーマ別グループ研究」のなかで進める。研究指導は主にゼミナールの主任教員・副主任教員が担当が、学生が設定するテーマによっては、他の本務教員・非常勤講師も指導に加わる。ゼミナールは6つあり、「世界と日本の文化」「環境と経済・社会」「ライフスタイル」「人間形成と教育」「自然の理解と創造」「数理モデルとインターフェイス」である（なお2018年度は「環境と経済・社会」ゼミナール所属の4年生はいなかった）。2018年度の4年生は2008年度3年生から始まったテーマ別グループ研究体制の最後の学年となる¹。

2年課程の卒業勉強は、クラス担任教員のコーディネートのもと進められる。1年次後半に学生が話しあってテーマを決め、テーマに基づき指導教員を決定する。指導教員は原則として本務教員が担当が、非常勤講師が担当こともある。4年課程と異なり、十分に作法などを学んだうえでの研究活動というわけにはいかないため、卒業“勉強”と名乗っているが、行っていることは研究活動である。4年課程よりもPBL（Project Based Learning）の要素を強

め、グループで行うことを旨としている。また、研究活動の時間は時間割にも組み込まれている。

最高学部の研究活動の特徴は何か。そのひとつは、リベラルアーツの上に立つ研究活動であること、すなわち研究テーマが学んだ学問のひとつの応用として可能なことを探求するというよりも、広い問題意識や興味・関心から決まることが多いことが挙げられる。問題の解決のために必要な学問をその都度修得しつつ研究を進めるという意味で極めて実践的でもある。そのため研究指導にあたって外部の専門家を招聘することが多い。もうひとつの特徴として、学生は個別に指導教員との交わりの中で学問領域の専門性を高めるだけではなく、一方で学生間の交わりから研究を重ねあい、学問領域を横断する幅広い視野を養っていることが挙げられる。研究を進める過程で5月、9月、12月の3回ほど互いの進捗を聞きあう場がある。また、最高学部が付属高等科出身生のみから成ることもあり、ゼミナールや同学年をはじめとする学生間の連携は強い。

II. 2018年度の研究

2018年度の4年課程卒業研究と2年課程卒業勉強はどのようなものであったか、2019年3月2日（土）の9時から15時まで自由学園記念講堂で開催された報告会の発表内容をもとに紹介する。紙面の都合上すべての研究に言及できないこと、選択と解釈に私的バイアスがかかることを、ご寛容いただ

¹カリキュラム再編により、2018年度3年生から「テーマ別グループ研究」は「領域横断研究」へと衣替えし、新機軸の「経営実践研究」も導入された。領域横断研究は「フィールドサイエンス」「ヒューマンサイエンス」

「データサイエンス」「ライフスタイル」の4つのゼミナールから、経営実践研究は「マネジメント」ゼミナールから成る。これらのゼミナールの詳細については来年度の本記事にて述べる。

表1：論文題目一覧

4年課程卒業研究	
世界と日本の文化	
1	難民収容所：「保護」と「管理」
2	自由学園と学徒勤労動員：労働経験が生徒にもたらしたものを記録から考える
3	ネパールにおける参加型森林管理
4	日本と欧米におけるポピュリズムの解釈の相違とその諸問題
5	アフォーダンスの観点からパルクールを考える
6	アーミッシュは現代社会の中で、どのように存続してきたか？：アメリカを中心に考える
7	自己決定とアナーキズム：高群逸枝『恋愛創生』を通して考える
ライフスタイル	
8	デンマーク体操の普及に関する研究：子どもを対象としたリズムカル体操の効果と浸透の可能性
9	アクティブシニアのライフスタイル研究：高齢者のQOL向上に向けて
10	大学生の成長に合わせた教育寮についての研究：光風寮の教育的役割と仕組みについての考察
人間形成と教育	
11	学校教育におけるキャリア形成（共著）
自然の理解と創造	
12	自然と人のかかわり：武蔵野台地 東久留米と板橋
13	人の健康と食について：生姜の含有成分を活用
14	ビールの持つ地域資源としての可能性を探る：柳久保小麦を使ったビール作り
15	食材残渣の腐植化の検討
数理モデルとインターフェイス	
16	デジタル写真における若者の好む色合いと生活行動への影響
17	自由学園遺跡情報データベースおよびデジタルアーカイブズの構築（共著）
18	那須地域の雲形分類
19	グラフのハミルトン性に関するバルネット予想についての研究
20	自由学園における大学ポータルアプリの構築（共著）
21	敬語学習のゲーミフィケーション
22	ICT機器の内部構造理解のための実践的情報教育
2年課程卒業勉強	
23	最高学部における朝食への意識改革と提案（共著）

きたい。なお、論文は自由学園図書館で閲覧可能である（中には一部あるいは全部を閲覧不可としている論文もある）。

世界と日本の文化

所属する7人が7つの研究に取り組んだ。

表1の3番は、森林管理に関する国際的な枠組みを体系化し、そのもとで東南アジアにおける参加型

森林管理の変遷を整理した。自身も3回参加した自由学園のネパール植林活動を具体例とした。

表1の7番は、現代女性の“性の自己決定権”（性行為・妊娠・出産に関することを自分で決める権利）について、明治から昭和を生きた女性解放家の高群逸枝の著書『恋愛創生』を通して考察した。

報告会では、7人の個別研究の意義について、題目やテーマではなく研究の視点から分類・議論する

ことで、より広い視野の中で位置づけていた。

ライフスタイル

所属する3人が3つの研究に取り組んだ。

表1の8番は、デンマークのオレロップ体操アカデミーへの1年間の体操留学経験を生かして、自由学園関係者ならびに近隣地域にリズムカル体操を広めた。リズムカル体操の楽しさと生活に活かせる効果を明らかにした。

人間形成と教育

所属する4人で1つの共同研究に取り組んだ。

ともすれば進路指導・就職支援に偏りがちなキャリア教育について、本来目指すものは何なのかをそれぞれの経験にもとづき議論した。とくに登山(遠足)、寮生活、デンマーク体操など自由学園の教育要素や、多様性、学びなおしの観点から探求された。結論として、様々な体験を通して豊かな感性を養うこと、他者との関わりの中で自分の価値を考えることから、ひとりひとりが自己実現するための学びであるとされた。

自然の理解と創造

所属する4人が4つの研究に取り組んだ。

表1の13番は、体内の血行を促進すると言われる生姜について、実際に学園内で5品種を栽培し、有効成分の含有調査を行った。また、栽培した生姜と東久留米市産の小麦を用いて、ジンジャーケーキも作成した。

数理モデルとインターフェイス

所属する10人が7つの研究に取り組んだ。

表1の17番は、自由学園で1936年以降12回にわたって行われた大規模な縄文時代の発掘調査の遺物や記録のデジタルアーカイブズを構築した。とくに復元率の高い21個の発掘土器は3Dモデルとなっておりウェブ上で360度回転してみることができる。

表1の20番は、最高学部のポータルアプリ(昼食注文や休講情報提供などを実装)をiOS版とAndroid版の双方で開発して実際に運用し、何度も

改良を重ねた。「今後も使いたい」という学部生は96.7%に及んだ。

2年課程

在籍する5人全員による共同研究である。

自由学園の特徴ある学びの1つである食に着目した。昨今、大学生の朝食欠食習慣が問題になっていることを背景に、最高学部生の摂取状況と意識の調査を丹念に行い、その結果をふまえて、最高学部生がより良い朝食を摂取できるような環境づくりや食教育についての提案をした。

Ⅲ. 評価

4年課程卒業研究も2年課程卒業勉強も提出された論文と報告会での発表の総合評価で成績が決まる。とくに論文は主査1名(これは主たる指導教員が担う)と副査2名(うち少なくとも1名は卒業研究の指導に携わっていない教員が担う)により評価され、この結果と報告会の内容を踏まえて、ゼミナール主任会議(本務教員も全員参加)が最終成績を判定するのである。2018年度は23本すべての研究が合格で、うち2本がS評価、11本がA評価であった。

報告会の来場者は、最高学部生、高等科生、リビングアカデミーの方々、保護者の皆様、研究でお世話になった方々など、おおよそ150名であった。近年様々な大学で卒業研究の発表会が外部に公開されるようになったが、自由学園では、創立者の教育理念に基づき、学部創部以来50年以上に亘って伝統的に行われている(遠藤2004)。報告会の来場者にはアンケート形式で感想をいただいているが、今年はそれぞれの発表へのコメントでいただいた。32名から444件のご記入をいただき、発表者の大きな励みとなった。また報告会全体に向けても次のようなメッセージもあった;「一見バラバラであっても実はつながりがあり、それを意識して聞くことができました」(在校生)、「ご指導の先生方のお話があったかくありがたいものでした。すばらしい教育を受けさせていただいて改めて感謝いたします」(保護者)、「学ぶ姿勢の背景にそれぞれの1年間が活かしていると感じた」(教員)、「初めて参加した報告会、

感動と共に去る。来てよかった。自分を振り返るチャンスだった。素晴らしい学生さん達。教育の力を再認識」(無記入)。

研究を終えた学生はどのような感想をもったのであろうか。まず 4 年課程のリーダーは次のように語っている；「時には研究が思うように進展せず、行き詰まる友人を励まし、壁を乗り越えた時には共に喜び合った。卒業研究は個人だけではなく皆で創り上げられたものだと感じた」「約 2 年を通しての研究をし、学園での学びの集大成ともいえる報告会を終え、皆が大きく成長できたと感じる」(浅井ら 2019)。2 年課程のリーダーは次のように語っている；「卒業式を前に、今までなんとなく感じていた自由学園の教育を言語化し、まとめることができた良い機会となった」(石井・山内 2019)。

IV. 結語

2018 年度の最高学部 4 年課程卒業研究と 2 年課程卒業勉強について、その狙い、内容、評価について述べた。結びにかえて、研究の広がりについて述べる。

2018 年度もいくつかの研究は学外でも発表された。表 1 の 20 番と 22 番は、2018 年 3 月 12 日(土)に福井大学で開催された日本教育工学会研究会：ICT を用いた学習環境の構築で口頭発表された(遠藤 2019)。また表 1 の 21 番の研究で制作された敬語学習のカードゲームは、報告会にいらした企業経営者の目に留まり、実際に会社の研修で使用された。2018 年度は大学院に進学する者が多く(表 1 の 1 番, 3 番, 4 番, 7 番, 19 番)、いくつかの研究は継続して行われることであろう。

2015 年度から最高学部は、自由学園リポジトリ構想(自由学園の学術情報をデジタル媒体で発信する)の一環として、研究誌『生活大学研究』を刊行している。『生活大学研究』は、原著論文、資料、寄稿、

ニュースからなるオープンアクセスのオンラインジャーナルである。リベラルアーツ教育に関連する研究と教育活動を促進し、できるかぎり自由に研究成果や教育実践を発表できる場を提供している。文部科学省所管の独立行政法人科学技術振興機構が運営する電子ジャーナル公開システム J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/>)にてデジタル配信され、どなたでも自由に閲覧可能であるので、ぜひご覧いただきたい。

謝辞

文末となりますが、この場をお借りして、報告会にご来場のすべての皆さまにあらためて感謝申し上げます。あわせて、学生の研究指導にお力添えくださいましたすべての皆さまに深く感謝申し上げます。

参考文献

浅井皓生・中村弥生・渕野朝恵(2019), “生活から得たものを探求”, 学園新聞 第 709 号(2019 年 3・4 月号), 自由学園出版局。

石井幸乃・山内早弥(2019), “食から考える生活の学び”, 学園新聞 第 709 号(2019 年 3・4 月号), 自由学園出版局。

遠藤敏喜(2004), “プレゼンテーションを通しての実践的情報教育の取り組み”, 平成 16 年度情報処理教育研究集会論文集。

遠藤敏喜(2019), “学部生が教育工学会研究会で研究発表しました”, 自由学園公式ウェブサイト, <https://www.jiyu.ac.jp/college/blog/ki/64164>, 2019 年 3 月 12 日公開。